



TITLE:

佐々木哲夫君の思出

AUTHOR(S):

熊谷, 鬼堂

---

CITATION:

熊谷, 鬼堂. 佐々木哲夫君の思出. 天界 1921, 1(9): 166-168

ISSUE DATE:

1921-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159591>

RIGHT:

にこそはりや七月上旬僕は君を病床上の人として再び君が家に見しこそ返すべくも遺憾なれ

三月に起つた病氣を六月になつて始めて醫者に見て貰ふたさういふ程君は一面容氣な人間になつて居たのだ病勢も左程闊しまも見へず精神は此の如く悠々として居る靜養したらやがてだんくよくなるであらうと思はれた

悲哉想像は當らなかつた病勢は次第く強くなつた恰も大軍の曠野を壓するが如く靜かにく力強く進て來る人間の力醫術の能力は此に到て何等の權威なきものとなつた大正十年二月二十二日の夜地上に萬斛の憾を残して英魂遠く天界に飛び去つた

君は既に信仰の人である一面に於て周到の注意を以て治療に従事し人力の限りを盡して病の平癒を希圖せしも一面に於ては神を信じ命に安し悠々迫らざる眞に敬服に餘りあり君の褥中に在るや看護は偏に慈母の任なりき君は言ふ「私が容子が悪いとおつ母さんはすぐ心配して元氣がなくなるから私が氣合をかけてやります」と（氣合動作は禪修行の一にして之を雄健雄詰といふ）母さんは君を看護し君は母さんを看護した

病は愈進て遂に腦を浸すに至つた意識は朦朧として殆んど病苦を知らざるものゝ如し慈親は寧ろ臨終の苦惱なきを喜ばれたりし死に臨んで大聲誦の名を唱へし是れ君が生涯の勝関かいとも尊き事にぞありける

嗚呼靈魂去て今何れの處にか迷ふらんそは十萬億の西方淨土にはあらで君が発見せしてふそが彗星の邊りにやあらん（南無）

（大正十、三、十三、稿）

## 佐々木哲夫君の思出

熊谷鬼堂

一

佐々木哲夫君は大正四年三月に岩手縣の師範を卒業した。師範學校に在學してゐる頃からどこか他の生徒とは異つたタイプを備へてゐた。肩をそびやかして大道を闊歩する所謂學生氣取をする方でもなかつたし、餅屋やそば屋を馳けまはつて青年らしい野次性を發揮する方でもなかつた。駄洒落言つたり、帽子を横丁に被る方では無論なかつた。さうかき云つて別に君子氣取をしたり、傲慢面する方でもない。實際は廣く求めないが深い方で、いつくり心の會ふ友を得て深く純に交る方の人であつた様だ。從て、豪傑風に粗雑に廣く誰さも交際はするが眞に會心の友のないといふ、所謂實際家さは自らその選を異にしてゐた。他の學生が餅屋にかけ込んだり帽子横丁に大道を闊歩する時には、圖書室に這入つて専心讀書するが、ひさり郊外を散歩して思ふ様自然の大氣に侵るさういふ様であつた。佐々木君は多くの場合ヒトリ居る方が多かつた様に今思ひ出される。然し少しも徒然ださか退屈ださか思ふ顔附なごはしなかつた。常に忙しさうに生きくといろいろの研究を續けてゐた。眞理の研究は彼の唯一の慰藉であつた様だ。彼は天性學者的素質を多分に持つてゐたつたのだらう。そこに彼れをしてヒトリ居らしむる原因があり又ヒトリゐて徒然も退屈も感じさせないところがあるのだ。

## 二

何でも、佐々木君の師範二年頃でもあつたらう。當時この書店であつたか忘れたが、ネルソンの百科全書の縮刷を一冊五十錢づつの月賦で配布する時があつた。その時佐々木君は、その全書を皆買込んで、自分の本籍に備へ、暇で皆同僚が雑誌に耽つてゐるまきに、そんな雑誌家などには頓着もなくネルソンの全書を読み始めるのであつた。或上級生は陰口をいつて「佐々木はあの全書がわかるんだらうか。すふん街學者だな。先達は獨逸語など調べてをつたけ。」と幾部の嘲笑味を加へ話したのが聞けた事があつたが、或一部の人間からはさう見られる程俗衆から超然たる態度をとり、あたりかまはず研究にふけつたのであつた。唯惜しいことに身體は余り學校時代からたつじやな方ではなくて始終含嗽したり、妙な香のする薬を呑んでやつた。従つて身體には可なり注意して、朝は早く起きて冷水塵操をしたり深呼吸をやつたり適度の運動をさつたり細心なものであつた。

## 三

師範學校時代には、氏をして世界に名聲をさどろかしめた天文の研究などはさうしてゐなかつた様に思ふ。英語や數學は嗜好學科であつたさ見ねて中々勉強した様であつた。殊に物理や化學は幼少からの訓練でもあるか一倍にすぐれてゐた。(佐々木君のお父さんが此の方面に興味があればとまで家には小さな實驗室丁裁の別室があつて幼少の折から親しませてならる様である。佐々木君の令弟である佐々木萬夫君といふのが師範を卒業して一年、二十二?のときだが、化學の文藝に及第した程の秀才である。之を要するに萬夫

君の天稟がすぐれてゐるのは勿論であるが、お父さんの幼少からの悠うした方面の自然的訓練もあづかつて効果あるのだと思ふ。)佐々木君が何時頃から天文方面の研究に一生懸命になつたが私にはハッキリわからん。が、兎に角、つしり、研究に着手するに至つたのは、師範學校を卒業しても身體が弱かつたために採用されず、二三年家になつて遊ばねばならなかつた時からであつた様だ。實にそれを好機として(或種の人達には師範を卒業しても採用されずになることは非常な不幸なそして惱ましいことではあるが佐々木君の絶えず求むるの心は却つて此の不幸を好機としたのである。)熱心に神秘に充ちた天空を觀測することに趣味を感じ、徹底的に研究するに至つたらしいのである。望遠鏡を自分でつくつたり、その他、種々な機械をも製作して天文學者として將來大翼をひろげる準備を既に此の時つくつたのである。殊に水澤の緯度觀測所長木村榮博士の親切な御指導を受けるにいたつては一層猛烈な研究慾に燃れた様であつた。

## 四

小學校に職を執る様になつてからも無論天文研究は怠らなかつた様だ。一日の煩雜な勤めが終つて寓居にかへるや疲勞を慰するひまもなく直に天體の觀測をなし、時には同僚を呼んで實際に天體の様

子を觀せ乍詳細の説明を與へる等實に熱心なものであつたらしい。

或小春日の暖い日であつた。自分は或村からのかへり早朝自轉車をこぎて來るさ向ふから大きなクロース表紙の本を見乍、小春日の柔らかな日光を身體一杯に浴しつづつくりさ歩いて來た人があつた。「はて誰だらう、あんな大きな本を熱心に見乍來るのは」さ少しその熱心に驚き乍不審を感じつつ近いて見た。それは誰あらう佐々木君であつた。

「やあ只今かれ、随分早いお語めだね」さひよいと自轉車から下りて立話する途端に本をのぞいたら、解拆幾何の講義であつた。その時自分の心には「やつてるな」といふ感が直ぐ浮んで來たつた。

「小學校の先生もずいぶん忙しい仕事だが、やつぱり楽しみのある仕事だね」といふ様な事を佐々木君がいはれた様だつた。佐々木君は小學校の仕事も可なり熱心にやり、殊に理科方面の授業には非凡な技倆を示し、學校の諸設備なども一寸の間の就職ではあつたが可なり整頓したとの話であつた。

然し似の違ひ道は解拆幾何を必要とし高等數學を自習せねばならない方であることを常に念頭に於て、寸時も休まず奮勵したことは、矢張奮闘家の面影を示してゐたのであつた。

## 五

佐々木君は天文の様な全く人間放れのした研究をしてゐる人だから、冷たい科學者であるかといふに又一面趣味の人でもあつた。繪も好きであつたし創作も熱心に讀んでゐたし、短歌なども愛誦してゐた。大條氏について書を稽古したこともあつた。すべて熱心に事にする。當とは佐々木君のすぐれてゐるところである。

佐々木君は嘗て私を訪れて呉れたとき、私の書架の本を一瞥して、ゲーテのフアウストのあるを見て、ゲーテの生涯についての話をし、フアウストの感想などを述べられたのだつたが、その時自分は佐々木君の文藝的方面の教養に或驚きを感じた。最初には佐々木君を全然此の方面の門外漢であると思ふてをつたのに種々話して見るさ中々侮りおたい教養の深さを示すのであつた。京都の方に行く少し前頃から短歌などを作つて、地方の青年仲間雑誌などに載せてゐた。私が經營してゐた「教育の曙光」に時折天文に關する原稿を書いて呉れたのだが、非常に趣味的に文章も潤味ある筆致で書いてくれたつた。之も要するに文藝的の教養を暗示してゐたのである。

## 六

京都に於ける一年有余は佐々木君の生涯中最も幸福な光輝に充ちたものであつた様だつた。佐々木君からの常の通信にもキツト未來の幸福に對する強い憧憬の或暗示があつた。自分の現在の境遇に對する明い讚美が示されてあつた。私達も心から佐々木君の將來に對する祝福を祈願してゐた。佐々木君星を發見したとの報を私達は聞睹するに至つたとき、その雀躍、その喜びは、何を以てするを得ない程極度に達したつた。愈々佐々木君の舞臺が開けて來たれど郷黨の友と話し合つてゐた。計らざりき全く此の期待を裏切るるさは、佐々木君は遂に病魔に冒され大神の大御名を唱へつつ永遠に現世を旅立たれた。彗星の如く佐々木君は消れた。然し君の魂魄は無窮に學界に輝くであらう。嗚？（大正十年三月十日）